

## Moodle による社会福祉士国家試験対策 2011 年度の試行

木村有里、白川 充、熊谷健二、嘉村 藍

仙台白百合女子大学

kimura@sendai-shirayuri.ac.jp

**概要**：2009 年度から、Moodle を活用した e-testing による社会福祉士国家試験対策を試行して本年度で 3 年目となる。2011 年度は昨年までの取り組みに対する課題から下学年への学習支援の必要性に着目し、4 年、既卒者に加えて 2・3 年生にも対象を広げた。

本報告では、本システムの全体像と特徴（毎日の問題更新、作問、フィードバック、月例懇談会、勉強会）を紹介し、本年度の前期までの取り組みと、特に今年度新たに下学年を対象に実施した、単位習得済科目の理解度の点検を行う学習支援について報告をする。

キーワード：Moodle、e-testing、社会福祉士国家試験対策

### 1 はじめに

仙台白百合女子大学（以下、本学）では、福祉系専門職を養成しており、国家試験対策のため、Moodle の特に小テスト機能を活用した社会福祉士国家試験対策に関するシステム（以下、本システム）開発を実施している。

本システムは 2009 年度から開始しており、今年で 3 年目となる。第 1 期（2009 年度）は在学生のみを対象としたが、第 2 期（2010 年度）は既卒者を対象に加え、更に第 3 期（2011 年度）では下学年を対象に加えて現在もシステム開発に取り組んでいる途中である。

本報告では、約 3 年間の取り組みの概要と 2011 年度の新たな取り組みを紹介し、そこから得られた課題と考察を報告する。

### 2 これまでの国家試験対策システムの概要

#### 2.1 システムの特徴

本システムの特徴は、①毎日平日 e-testing にアクセスして問題を解くこと、②週 1 回 2 問の作問をすること、③週 1 回ミニ模試を受験すること、④週 1 回教員からのフィードバックを受けること、⑤月 1 回の月例懇談会に参加すること、を主な学生モニター（以下、モニター）の役割としていることである。

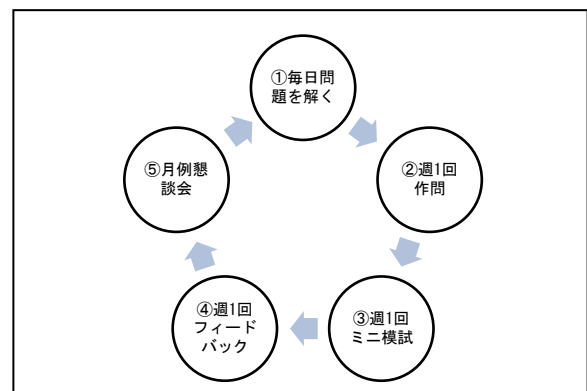


図 1. モニター（学生）の取り組み

加えて教員の役割としては、①教材である問題の作成とチェック、②週 1 度担当モニターに対するフィードバックの実施、③コースの運営管理、④モニターへの学習支援全般と指導、⑤システム開発と向上を基本軸として試行している。

また、本学で定めている一定の条件を満たした希望者については、VPN の利用をすることにより、学外から本システムを利用することが可能である。  
[2]

#### 2.2 第 1 期：2009 年度の取り組みについて

第 1 期（2009 年度）のモニターは 4 年生 9 名、3 年生 1 名の計 10 名であった。社会福祉士国家試験の合格率は、受験資格の有るモニター（4 年生）

9名中6名が合格をした。合格率は66.6%であった（全国合格率27.5%）。2009年度の取り組みについては、本研究集会の昨年度報告を参照されたい。[2]

2009年度の試行から①問題のチェック体制の効率化、②フィードバックの効率化、③学習支援方法の開発、④教職員間でMoodleの操作方法とスキルの標準化を図ること、⑤国家試験に臨むに当たっての必要な目標設定・勉強の仕方と進め方に関する共通理解の必要性、⑥モニター学生同士の協力関係を意図的に作っていく必要があること等が課題として得られた。[1]

### 2.3 第2期：2010年度の取り組みについて

第2期（2010年度）は5月から運用を開始し、2010年度は新たに卒業した学生（以下、既卒者）への国家試験対策の支援も試行することとした。モニターは既卒者2名、4年生3名の計5名であり、既卒者1名が合格し、合格率は20%であった（全国合格率28.1%）。

基本的な取り組みは2009年度と同様であり、2010年度は2009年度で得た課題を改善するよう、さらなるシステムの向上を図った。特に、「①問題のチェック体制の効率化」に対しては、慢性的な問題不足であったが、教材作成を教職員とモニターだけではなく、外部問題作成協力者の協力を得ることで、これを解消した。これにより、教職員は問題のチェックと更新に集中して運営を行えるようになった。また、「②フィードバックの効率化」に対して、それまではメールによるフィードバックを実施していたが、モニターへの助言指導内容を各教員間で共有するには非効率であったため、Moodleのフォーラム機能を活用してより効率的なフィードバックを行えるよう工夫した。

さらに、「⑤国家試験に臨むに当たっての必要な目標設定・勉強の仕方と進め方に関する共通理解の必要性」に対しては、運用の開始前にモニターへの本システムの基本方針等を説明した。本システムを活用した勉強の仕方を提示し、毎日更新す

る問題を解く際には、「①何も見ずに問題を解く、②教科書や参考書を利用して復習をする、③一定の時間をおいてから必ずリトライする」ことを徹底させた（図2）。

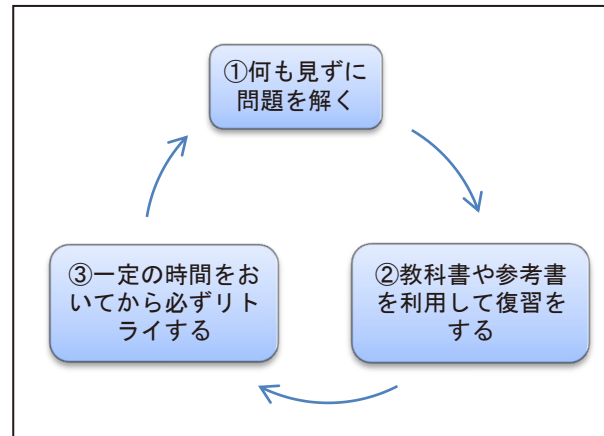


図2. 本システムを活用した勉強の仕方

また、モニター自身がどのように取り組むのか明確化させるために、「達成目標と自己目標作成シート」と「自己分析シート」を作成した。前者は年間の目標等を計画させることを目的としており、後者は自己の1ヶ月の取り組みを分析、改善して翌月の取り組みに反映させることを意識させることを目的としている。「自己分析シート」は月例懇談会で報告する際のフォーマットとなる。「⑥モニター学生同士の協力関係を意図的に作っていく必要性」については、月例懇談会でモニター同士の交流を図るほかに、フォーラムに「e-tes.日記」を作成し、モニターが自由に日々感じたことなどを書き込めるようMoodle上にモニター同士が交流できる場を設定した。

尚、2010年度は作成した教材の著作権や、動画や映像を撮影する際の肖像権などの権利や倫理的問題への配慮から、モニター及び外部問題作成協力者と契約書を取り交わして運営した。

2010年度の課題は、特に①2009・2010年度の2年間で蓄積した教材の内容や質の精査の実施をすること。また、2010年度は既卒者の合格者が出たが、2010年度の合格率の低迷（表1）に対する対策として、②引き続き学習支援方法の開発を検

討していくことと、③国家試験を受験する前の下学年の段階から国家試験指定科目に対する理解度のチェックと支援が必要ではないかという課題を得た。

表 1. モニター数と合格率の推移

	モニター数 *1	合格率	全国合格率
第 1 期 (2009 年度)	10*2	66.6%	27.5%
第 2 期 (2010 年度)	5*3	20%	28.1%
第 3 期 (2011 年度)	12*4	未受験	未受験

\*1: 年度末のモニター数 (辞退者を除く)

\*2: 内 4 年生 9 名、3 年生 1 名

\*3: 内既卒者 2 名、4 年生 3 名、

\*4: 内既卒者 4 名、4 年生 1 名、3 年生 6 名、2 年生 1 名

## 2.4 第 3 期 (2011 年度) の取り組みについて

第 3 期 (2011 年度) は、6 月上旬から下旬にかけてモニターの募集を実施し、7 月から開始している。特に、既卒者に対しては、本学のホームページによる公募を行った。また、国家試験指定科目の知識の点検を早期に実施することを視野にいれ、下学年から実施することの必要性から、第 3 期は 2・3 年生にも受講資格を与えた。本年度のモニターは既卒者 4 名、4 年生 1 名、3 年生 6 名、2 年生 1 名の計 12 名である。

第 3 期も本運用に入る前に、本システムの基本的な方針等と Moodle の操作方法についての説明会を実施した。また、第 2 期において「達成目標と自己目標作成シート」はあまり活用されていなかったため、より具体的に各月の目標を記入できるように工夫した。「自己分析シート」についても、「達成目標と自己目標作成シート」と連動させた形式に改訂し、毎月の取り組みと自身の勉強の仕方を分析し計画的に実行できるよう指導している。基本的な取り組みは変わらないが、本年度から下

学年への学習支援を模索すべく実施している。

## 3 下学年に対する学習支援

本学では、社会福祉士国家試験受験資格取得に関わるカリキュラムが 1 年次から配置されている。社会福祉士国家試験の指定科目は 19 科目 (実習・演習科目を除く) あり (表 2)、下学年で履修した科目は、科目によって実習や演習で触れる機会があるものもあるが、履修後は直接的な国家試験指定科目の知識群に対する理解の点検をする機会はほとんどなく、そのため多くの学生は 4 年生になって初めて国家試験の受験を意識し、参考書や過去問を解くなどの勉強を始めている状況であると言える。

また、19 科目を 4 年次において、集中的に勉強することも大変な時間と労力を要する。効率的かつ計画的に実施するため、一定程度の指定科目の知識の習得について、下学年のうちから学年ごとに点検していくことが必要であると考えた。

表 2. 社会福祉士国家試験指定科目と学年ごとの更新

社会福祉士国家試験指定科目	対象学年
1 人体の構造と機能及び疾病	2 年 3 年 4 年 OG
2 心理学理論と心理的支援	
3 社会理論と社会システム	
4 現代社会と福祉	
5 相談援助の基盤と専門職	
6 地域福祉の理論と方法	3 年 4 年 OG
7 社会保障	
8 低所得に対する支援と生活保護制度	
9 利権と成年後見制度	
10 高齢者に対する支援と介護保険制度	
11 障害者に対する障害者自立支援制度	
12 児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度	
13 福祉行財政と福祉計画	4 年 OG
14 保健医療サービス	
15 相談援助の理論と方法	
16 福祉サービスの組織と経営	
17 社会調査の基礎	
18 就労支援サービス	
19 更生保護制度	

そこで、2 年生では、1 年次に履修した科目について、3 年生では 1 年次・2 年次に履修した科目について、4 年生・既卒者と同様に国家試験と同じ形式の問題を毎日平日に 1 日 3 問解き、金曜日に

は1週間に掲載された問題に新たな問題を加えてミニ模試として解いてもらうことを実施した。作問についても、履修した科目の中から作問をしたい科目を選び、既卒者・4年生同様に毎週2問の提出をもらった。

また、同じ Moodle の画面で各学年において、更新される科目が異なるため、学年ごとグルーピングを行い、各学年の履修済み科目に適した問題を学年ごとに更新することが可能となった(表2)。

#### 4 考察と課題

2010年度から既卒者モニターへの学習支援を実施してきた。2009年度・2010年度にモニターへアンケートを実施し、「e-testing の評価すべき点は何か」と問うたところ、「勉強する習慣が身につく」、「フィードバックで評価や指導を受けられる」、「他にメンバーがいることで良い刺激を受ける」などの意見が見られた。[2]

既卒者にとって毎日問題が更新され、自宅でいつでも利用できるシステムがあることは、勉強をする習慣を長期的に維持することができる一つの大きな要素になるようである。また、既卒者が国家試験に臨む場合、その多くは自己学習が中心となるため、他の受験者との交流や指導を受ける機会が少ないが、本システムでは月例懇談会や勉強会、フィードバックなどで他のモニターとの関わりや教職員からの指導や評価を受けることが出来るため、社会人として働きながら長期間国家試験の勉強をするのには有効な方法のようである。

一方で、合格率が低いことへの対応として、本年度は下学年への学習支援を試行している。4年生においては、最終的に1月末にある国家試験に合格することが一つの目標となるが、下学年の段階では、まだ実感を持ちにくい目標であり共有は難しいようだ。履修済み科目についてどの程度の知識の集積をすることを目標とするのか、提示しているやるべき問題数のうちどのくらいやらなければならないのか、その目標が曖昧である。現在下学年の問題の内容や更新の仕方については、これ

まで4年生や既卒者の使ってきた教材を使用しているが、問題の出題の仕方や内容についても今後検討が必要と思われる。

#### 5 おわりに

現在も試行途中であるが、第1期から様々な試行を重ね、既卒者や受験生である4年生に対しては一定の学習支援システムの形ができつつある。一方で、下学年への学習支援については課題もあり、今後も効果的な学習支援システムの開発を試行していきたい。

#### (註)

- 1) 2009年度の3年生については、プレ試験運用[1]の協力員であり、本試験運用への継続の希望があったためそのままモニターとなった。
- 2) 外部問題作成協力者：現在、福祉の現場で働いていて社会福祉士国家資格を有している方々に協力を依頼し、不足している教材(問題)を割り当てて毎週問題を2~3問提出していただいた。
- 3) やるべき問題数とは、本システムで国家試験に臨むにあたって「過去に出題された国家試験問題150問×5年分×3周=のべ2250問」を一つの目標として提示した問題数である。

#### 参考文献

- [1] 嘉村藍、白川充、熊谷健二、木村有里、郡山昌明「Moodleによるe-testing学習支援システムの試行—社会福祉士国家試験対策システムを中心に—」、仙台白百合女子大学紀要、14号,pp.151-171, 2009年。
- [2] 嘉村藍、白川充、熊谷健二、木村有里「Moodleを活用した社会福祉士国家試験対策の試行」、平成22年度情報教育研究集会講演論文集,pp.348-351, 2011年12月。